

養護教諭養成課程における死生観を養う教育の検討

二木はま子*・三浦弥生

The Study of Education that Encourages Death

Attitude for the Yogo teacher Students

Hamako FUTATSUGI* and Yayoi MIURA

要旨：高齢者に焦点を当てた終末期ケアの授業を行い、臨老式死生観尺度を用いて授業前後の学生の死生観の変化と、授業後の意見・感想の分析を行った。結果、第Ⅱ因子の「死への恐怖・不安」と第Ⅳ因子の「死からの回避」で得点が有意に低減し、高齢者の終末期ケアを扱った授業が学生の死生観の変化に影響を与えていた。また、授業後の意見・感想からは、【死への恐怖】、【死からの回避】、【死を扱った授業内容に満足】、【看護への関心】、【死への関心】、【死の意識の変化】、【終末期ケアへの関心】、【身近な人の死を回想】、【生き方を考えた】、【生命倫理への疑問】の10カテゴリーが抽出された。学生は、高齢者の終末期ケアの実践事例や絵本を通して、【身近な人の死を回想】することで命が有限であることを認識し、【死の意識の変化】、【死への関心】、【生き方を考えた】など死生観が前向きに変化していた。死の教育内容としては、死に関する基礎的な知識に加えて、終末期ケアの体験談や絵本など身近な人の死をイメージし、いのちが有限であることを認識できる教育媒体が死生観を養うために効果的であることが示唆された。

Key words：養護教諭学生 (Yogo teacher Students), 高齢者の終末期ケア (End-of-life Care), 死生観 (Death Attitude), 教育 (Education)

はじめに

1970年代以降、医療の進歩と共に自宅でなく医療施設での死が増加し¹⁾、日常生活で身近に死や看取りケアの場面に出会うことが少なくなった。そのことは、日本における死を語る文化の醸成を困難にしている。

死の教育は生涯教育の一環として実施するべきであるが日本における現状は不十分である²⁾との指摘もある。小学校においても、いのちの大切さを伝えることの重要性が認識されるようになり、「生」を見つめる授業実践がみられているが「死」にふれる実践は殆どみられていない³⁾。また、青年期には自殺予防の観点からだけでなく、生きることを探求するうえで死の主題に取り組むことが必要⁴⁾で

あり、学校現場だけでなく社会人一般への死の教育が求められている。

一方、終末期ケアにおいて中心的役割を担う医師や看護師の教育に視点を当てた論文を検索すると、それまでは医師のみであったが、2000年頃から大学に所属する看護職の文献が多く輩出されるようになり⁵⁾、その後は介護職等医療職以外の文献もみられるようになっていく。これは2000年の社会福祉法、介護保険法の施行を背景に、死生観に関しても個々の権利擁護の立場で多職種が学際的に終末期ケアに関わるようになった結果と予測される。看護教育における死生観の育成については、授業や臨床実習を通して学生の死生観の変化を明らかにした先行研究⁶⁾がみられる。そして、看護学生の死生観に影響する要因を明ら

2011年5月23日受付；2011年7月25日受理

* 前飯田女子短期大学教授

かにした研究もみられている⁷⁾⁸⁾。さらに、看護学生への死の教育内容については、全国の医学科・看護学科のシラバスの調査を通して、教育プログラムモデルの開発⁹⁾も行われている。これらの動向は、死を語る文化に馴染まない日本であるが、終末期ケアに当たる専門職の教育においては、様々な模索が実践されていることを表わしている。

死生観形成には、文化的背景、宗教、教育など多くの要因が影響している⁸⁾¹⁰⁾¹¹⁾。小学5年生から大学生では発達の変化と死に関する経験によって死生観が大きく異なる⁴⁾。しかし、核家族の増大、医療技術の進歩に伴う施設内の死の増加により、死が家族から切り離され、学生が死を身近なものとして体験する機会が少なくなっている⁴⁾⁶⁾。そのことは、学生の死生観を形成する上で阻害因子となるだけでなく、死に対する否定的なイメージを形成し易い。そのような状況下において、生と死を考える授業が看護学生や介護学生の死生観形成に影響を与えることが検証されている¹²⁾¹³⁾。直接的な他者の死を経験することのみが死生観を決定するわけではなく、間接的な死の体験であっても死生観は形成される¹⁴⁾。本研究の調査対象となったA短期大学においては、浄土真宗の教えに基づく宗教教育を建学の精神¹⁵⁾とし、宗教行事や講義を通して死生観を養う教育が実践されている。

養護教諭養成課程における死の教育の必要性と現状については、ノーマライゼーションの思想の浸透や医療法の改正など社会的背景により、医療的ケアを必要としながらも地域の学校へ就学する児童生徒もみられるようになってきていることが挙げられよう¹⁶⁾。看護職や介護職と比較して死に遭遇する機会は多くないが、養護教諭を目指す学生が将来、児童生徒の疾病や喪失体験に遭遇することも充分予測される。その状況に戸惑うことなく対応するために、また、学生自身の豊かな人生のためにも死生観を育む教育が重要と言える。し

かし、養護教諭養成課程で用いている看護学のテキスト¹⁷⁾においては、健康レベルの最終段階として死を捉え、死をめぐる看護を「ターミナルケア」として取り上げているが、その内容は授業時間の配分から狭いものになっている。したがって、限られた授業数の中でどのように死を教えるべきかという課題が存在する。一方で報告数は少ないが、死の教育を養護教諭養成課程で実践した先行研究もみられ、学生は死を意識することで生き方を考えるなど前向きな価値観へ変化している¹⁸⁾などその成果も報告されている。このように、養護教諭養成課程においては、死生観を育てる教育は始まったばかりと言える。

看護学生に対する死の教育の目標については、「学生自らが自分の人生をこのように生き、このように死にたいという一つの理想をもてる」ことであり、「将来、臨床において生も死も包含した看護ができる基本的資質を身につけさせることである¹⁹⁾」としている。学生自らの人生を豊かにするために死生観を育てる意味においては養護教諭養成課程においても共通の目標が求められる。死の教育内容については、医学科・看護学科用教育プログラムモデル⁹⁾によると、生命倫理、終末期の定義、インフォームドコンセント、高齢者の生活の質、家族ケアなど10項目が提示されている。教育方法については、専門知識から感情的・情緒的側面、技術の習得へと段階的に進める必要がある²⁾。また、死にふれる教育は指導方法が重要であり、一歩まちがえたと児童がフラッシュバックしてしまうことが予想される²⁰⁾。そのため、絵本の活用が心的ショックなどを被ることなく安全に死について疑似体験させてくれ、わかりやすく親しみやすい教材²¹⁾である。また、読書による教育効果の検証²²⁾も行われている。

本研究における養護教諭養成課程での死の教育内容は以下のようであった。疾患や障害等健康レベルの最終段階として死をとらえる

方法でなく、学生が「死」というテーマに戸惑うことなく理解できるよう、誰にでも訪れるライフサイクルにおける「老いの延長での死」に焦点を当て、終末期における援助の意味やその在り方を取り入れてみた。具体的な方法は、「高齢者の終末期ケアに関する医学科・看護学科用プログラム⁹⁾を参考に構成し、さらに、筆者らの終末期ケアの実践事例、及び高齢者の死と向き合うのに適切と考えた絵本^{23) 24)}の活用を加味した(表1)。そして、終末期ケアの授業に対する学生の反応と評価を目的に授業前後の死生観の変化と授業後の感想・意見の収集を行った。

研究目的

本研究の目的は、終末期ケアの授業を通して養護教諭養成課程における「死生観を養う教育」の在り方を検討することである。

研究の枠組み

1. 概念枠組み

本研究においては、養護教諭養成課程においても高齢者の死に焦点を当てた終末期ケアの授業を提供することで、学生の死生観の変化が見られると仮定し、図1のような概念枠組みとした。

表1 「死生観を育てる」授業内容

	目 標	内 容	備 考
1	高齢者の終末期ケアとは何かを知る	1) 高齢者の死をどのように受け止めるか 2) 死とはどのような状態か 3) 終末期ケアの定義	1) 絵本『だいじょうぶだよ、ゾウさん』パワーポイントで絵本の画面をみせながら読み聞かせをする 2) 臨床的・法律的な死、死生観に基づく死を説明する 3) 終末期に類似した用語の概念を含める
2	終末期ケア提供の意義を知る	1) 終末期ケアを提供することの効果を事例から推測	1) 準備なく一人寂しく亡くなった事例と、家族の協力を得てその人らしい最期を迎えた事例とを比較
3	終末期ケアへの社会的要請を知る	1) 高齢者の死亡率の推移 2) 死亡場所の内訳・推移 3) 高齢者ケア施設での看取りニーズの増加	1) 高齢者死亡率の増加を示す 2) 死亡場所が自宅から病院へ移行している現状 3) 高齢者医療の問題⇒生活上の問題に移行「ケア施設での看取り」が選択肢になった
4	高齢者の自然な死の徴候を知る	1) 身体的な老衰の経過	1) 初期、中期、最終期に分けて理解する
5	死の徴候への対応を知る	1) 代表的な死の徴候とその対応	1) 臨死期に苦しそうな表情をするが本人はそれほどではない 2) 聴力は最後まで残るので声掛けが効果的である
6	終末期における4つの苦痛と対応を知る	1) 全人的な痛み(身体的・心理的・社会的・霊的)とその対応	1) 寄り添う、マッサージ、罨法、アロマ等の方法を紹介
7	終末期ケアに携わる職員の心構えを知る	1) 高齢者・家族の意思を確認 2) 職員自身の死生観を育てる	1) 高齢者の尊厳を守る 2) 多様な死生観に対応できる
8	まとめ	1) 誰も必ず老いて死がやってくる。限られた時間をどのように生きるか各自に問われている 2) 自分の命は両親・祖父母・祖先から引き継がれたもの。命に感謝しよう	2) 絵本『葉っぱのフレディ』を読み聞かせする

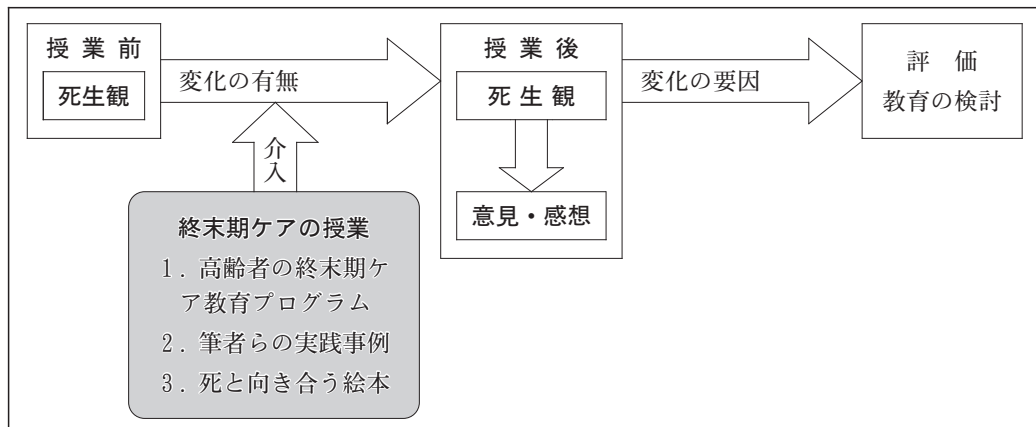


図1 死生観を養う教育の検討概念枠組

2. 仮説

高齢者の終末期ケアの授業は養護教諭養成課程学生の死生観の変化に影響を及ぼす。

3. 用語の操作的定義

- 1) 終末期ケア：近い将来死が訪れる高齢者に対して、残された時間を「その人らしく生きる」ために、高齢者の価値観に基づいた意思決定及び意思に沿ったケアの実践を家族と共に支援することをいう。
- 2) 死生観：生き方や死に方についての個人の考え方や価値観で感情を含む。

研究方法

1. 研究デザイン：

主要部分は仮説検証型研究デザイン，補足部分は質的記述的研究デザイン

2. 対象：

A短期大学養護教諭養成課程1年次生に開講されている看護学実習の終末期ケアの授業2コマを受講し，本研究に協力の承諾を得られた学生39名。

3. 調査方法：

1) 主要部分

平井ら(1999)の開発した臨老式死生観尺度¹¹⁾を，終末期ケアの授業前後に配布し無記名で回答してもらい回収した。

2) 補足部分

終末期ケアの授業終了後，授業に対する意

見・感想を自由記載してもらい回収した。

4. 調査項目

1) 主要部分

臨老式死生観尺度から，Ⅰ.死後の世界観，Ⅱ.死への恐怖・不安，Ⅲ.解放としての死，Ⅳ.死からの回避，Ⅴ.人生における目的意識，Ⅵ.死への関心，Ⅶ.寿命観の7因子27項目，7件法で回答してもらった。7因子の内容は，死後の世界はあると思うなどの項目を「死後の世界観」，非常に死を恐れているなどの項目を「死への恐怖・不安」，死をこの世の苦しみから解放されることだと思うなどの項目を「解放としての死」，死について考えることを避けているなどの項目を「死からの回避」，人生にはっきりとした使命と目的を見出しているなどの項目を「人生における目的意識」，死とは何だろうと良く考えるなどの項目を「死への関心」，人の寿命はきめられているなどを「寿命観」としている。

2) 補足部分

終末期ケアの授業を受けて感じたこと，分らなかったこと，もっと学びたいこと，今後に活かせることなどの意見・感想の自由記載を回収した。

5. 調査期間：

平成22年7月8日・7月15日

6. 分析方法：

- 1) 主要部分は，臨老式死生観尺度の分析，

各尺度得点の変動について対応がある t 検定を用い、有意水準 5% で有意差ありとした。

2) 補足部分 (意見・感想)

i) 終末期ケアの授業に関する学生の意見・感想文から記述内容を 1 内容 1 単位として抽出し、コード化した。

ii) コードの類似性と異質性によって分類・統合し、サブカテゴリー及びバカテゴリー化した。

- iii) 分析の信憑性を高める努力
- ①コード化の手順を 3 日程空けて 4 回行った。
- ②分析の一連の過程は、研究者 2 名で検討を繰り返し行った。
- ③分析結果を学生に提示し、分析結果の妥当性を確認した。

7. 倫理的配慮:

学生には、研究の趣旨を説明し協力を求めた。質問紙は無記名で個人が特定されないこと、結果は学習成績とは無関係であること、また協力しない場合や途中辞退しても何ら不利益はこうむらないこと、さらに紀要への掲載予定などを口頭及び文書で伝え、承諾を得た。

結 果

1. 有効回答数 (有効回答率)

- 1) 死生観尺度: 37 (94.9%)
- 2) 意見・感想文: 39 (100%)
2. 死生観尺度得点 (表 2)

臨老式死生観尺度において、授業前後の各因子を比較すると、第 II 因子「死への恐怖・不安」では、授業前が 5.00 ± 1.68 、授業後が 4.39 ± 1.85 であり、授業後において統計学的に有意な低減 ($p < 0.01$) を示した。また、第 IV 因子「死からの回避」では、授業前が 3.49 ± 1.73 、授業後が 3.16 ± 1.48 であり、授業後において統計学的に有意な低減 ($p < 0.05$) が認められた。

表 2 授業前後における学生の死生観の変化

項 目	n = 37		
	前	後	P 値
I. 死後の世界観	4.79 ± 1.32	4.73 ± 1.02	0.696 ns
II. 死への恐怖・不安	5.00 ± 1.68	4.39 ± 1.85	0.009**
III. 解放としての死	3.31 ± 1.52	3.55 ± 1.67	0.232 ns
IV. 死からの回避	3.49 ± 1.73	3.16 ± 1.48	0.048 *
V. 人生における目的意識	3.77 ± 1.33	3.85 ± 1.45	0.461 ns
VI. 死への関心	3.89 ± 1.50	3.77 ± 1.51	0.348 ns
VII. 寿命観	4.14 ± 1.57	3.95 ± 1.53	0.451 ns

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$ ns: not significant
表中の数値は、平均値 ± 標準偏差を意味する。

その他の因子においては、第 I 因子「死後の世界観」では、授業前は 4.79 ± 1.32 、授業後は 4.73 ± 1.02 であり、第 III 因子「解放としての死」では、授業前は 3.31 ± 1.52 、授業後は 3.55 ± 1.67 、第 V 因子「人生における目的意識」では、授業前 3.77 ± 1.33 、授業後 3.85 ± 1.45 、第 VI 因子「死への関心」では、授業前は 3.89 ± 1.50 、授業後は 3.77 ± 1.51 、第 VII 因子「寿命観」では、授業前は 4.14 ± 1.57 、授業後は 3.95 ± 1.53 であり、これらの授業前後の変動に有意な差はなかった。

3. 学生の意見・感想の分析結果

97コードから、最終的に 10 カテゴリーが抽出された。表 3 に示す。以下にそれぞれのカテゴリーについて説明する。尚、以下の記述において、【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリー、『』は下位カテゴリー、学生の記述 (データ例) は小文字で示す。データ例における () は場面の状況を説明するために研究者が補った記述部分を示す。

(1) 【死への恐怖】

【死への恐怖】とは、死に対して恐怖を感じるというものであった。このカテゴリーは、《死は怖く悲しいもの》のサブカテゴリーから構成された。

《死は怖く悲しいもの》とは、人の最後には必ず死があり、それは普遍的なことで逃れることができず、恐怖と切なさの感情を抱いているというものであった。

表3 終末期ケアに関する学生の意見・感想

カテゴリー	サブカテゴリー	下位カテゴリー
死への恐怖	死は怖く悲しいもの	死ぬということはとても怖いことでのがれられないこと
		死について考えると悲しくなって泣けてくる
		死を考えると怖かった
死からの回避	死を否定する	人は死なず、ずっと生きて行けばいいのになと思った
	内容に感動した	終末期ケアの講義に感動した 授業を受けてとても心に感じたものがある とってもいい授業でした
死を扱った 授業内容に満足	体験談が良かった	いろいろな話が聞けてよかった 現場の話がきけてよかった
	役立つ内容だった	ためになる授業だった
	記憶に残る内容だった	身近な人の終末期にこの講義を思い出すと思う
		今までの講義の中でも一番印象に残るものでした 「毎日を大切にする」「今を大切にする」言葉が心に残る
看護への関心	看護への理解が深まった	あたたかい看護が出来る人になりたい 看護は病気やけがを治療するだけでなく、心の面で患者さんを支えてあげることも看護のうちのかなと思った
	人との関わりへの興味	人と関わっていくことに興味が出た
死への関心	死についてもっと知りたい	この死生観研究の内容を知りたい 絵本や書籍の紹介を希望する 終末期ケアの話に興味がある
		死の受け入れ方が知りたい
		人生を考えた
	死について考えた	余命が少ないことを知ったら何をするか
		死とは何か
		死と向き合うことができた
		死について考えさせられた 死について改めて考えさせられた 死について考えることができた
	命を考えた	命というものをあらためて考えさせられた
	死の恐怖は変化する	死の恐怖は環境で変わる
	死の意識の変化	死への恐怖が軽減した
以前は祖父が亡くなってしまうことが不安だった		
身近な人の死を受け入れたい		(死と)ちゃんと向きあい看取ってあげたい
死を受け入れるべきだった		今までは身近な人の死を考えることを避けてきた 愛犬の死と向き合うべきだった

終末期ケアへの関心		看護師全員の終末期ケアの考え方が先生のようになってほしいと思った
		終末期ケアの大切さが分かった
	終末期ケアについての理解が深まった	終末期ケアについて、いろいろと知る事が出来た
		死を苦痛だとか不安に考えている人を、どうケアするのか分かった
		終末期ケアの話を聞いて考えさせられた
	終末期患者への対話方法が不安	終末期の患者にどうやって話をしたらいいのかとても不安
		終末期を決めておくことは可哀想だが大切なこと
	本人主体のケアが大切	終末期ケアは、患者さんにとって自分が自分でいられる点でいいと思った
	安心して最期を迎えられる援助がしたい	親が安心して最期を迎えられるようにしたい 手をにぎって大丈夫だよと言ってあげたい
	死と向き合い看取りたい	(死と)ちゃんと向きあい看取ってあげたい
幸せな最期を援助したい		先生に見送られた患者さんは幸せな最後だったと思う 自分の大事な人の最後がすばらしいものになるようにいろいろ考えてみたい
		介護職だったら、患者さんや利用者さんにとって一番幸せな状態で逝かせてあげられたらいいなと思った
		祖父母が幸せな最期であって欲しかった
身近な人の想いを叶えたい		祖母の希望(沢山孫との写真がほしい)を叶えた
		祖母のやりたいことを叶えたい
身近な人の死を回想	身近な人の死を回想	「毎日を大切に生きよ」と言った祖父の言葉を思い出した 小学校低学年の時祖父が死んで悲しかった 子供の頃に亡くなった祖父母や叔母を思い出した
	身近な人の死を予測	最近飼った犬が死んでしまった
		身近な人の死を予測する
生き方を考えた	今を精一杯生きたい	今を大切に生きていきたい 毎日を精一杯生きたい
	目標に向かって生きたい	毎日を一生懸命に生きることが大切 目標を決めて生きていこうと思った
	日頃から死を考えて生きる	親の死を常日頃から考えていきたい
	悔いのない生き方をしたい	悔いがないように死にたい 幸せに思えるような人生にしたい
死の決定方法への疑問		延命をどう考えるか 安楽死は誰が決定するのか
		検体解剖で使った健康な臓器は臓器移植されないのか 家族で臓器提供の賛否がわかる
生命倫理への疑問	臓器提供への関心	脳死の考え方や死んだ人の体を傷つけるのが嫌だ 臓器提供は本人の死後、家族が反対しても本人の意見が尊重されるのか
	余命の宣告の是非	余命が少ないことを本人に伝えるべきか
	検体解剖への関心	死直後の解剖の残酷さへの関心

死ぬということはとても怖いことでは
られないこと。(学生A)

(2) 【死からの回避】

【死からの回避】とは、死自体が存在しな
ければいいと思うというものであった。この
カテゴリーは、《死を否定する》のサブカテ
ゴリーから構成された。

《死を否定する》とは、人は死なずに永遠に
生き続けることができればいいのかという、死
を避けた空想的な理想を示したものであった。

人間は死ななくてずっと生きて行ければい
いのかと思いました。(学生B)

(3) 【死を扱った授業内容に満足】

【死を扱った授業内容に満足】とは、死を
扱った授業内容に対して満足感を得たとい
うものであった。このカテゴリーは、《内容に
感動した》、《体験談が良かった》、《役立つ
内容だった》、《記憶に残る内容だった》の4
サブカテゴリーから構成された。

《内容に感動した》とは、死を扱った授業
内容に心動かされるものがあったというも
のであった。

先生の講義を受けてとても心に感じたもの
があり、もし、これからそういうことがあ
ったらちゃんとむきあって看取ってあげたい
なと思いました。(学生C)

《体験談が良かった》とは、死を扱った授
業の中で教員が臨床現場で得た体験談が、
学生自身の心に残る内容であったというも
のであった。

終末期ケアのお話をきいて、現場の体験を
通してお話がたくさん聞けたのでよかったです。
(学生D)

《役立つ内容だった》とは、死を扱った授
業内容が、学生自身が将来に役に立つと感
じたというものであった。

とてもためになる授業をしていただきあり
がとうございました。(学生E)

《記憶に残る内容だった》とは、死を扱
った授業内容が、身近な人の最期に出会った時

思い出すであろう内容であったというも
のであった。

人生の最期をどう生きるか、どう看取るか、
これから生きていく中で身近な大切な人を失
うときがくると思います。そんな時、その人
のために最期に何ができるかを考えたとき、
この講義を思い出すと思います。(学生F)

(4) 【看護への関心】

【看護への関心】とは、看護の業務内容へ
の理解が深まり、また、看護を介して得られ
る人との関わりに興味をもったというも
のであった。このカテゴリーは、《看護への理解
が深まった》、《人との関わりへの興味》の2
サブカテゴリーから構成された。

《看護への理解が深まった》とは、看護は
患者の身体疾患だけではなく、心も支えるこ
とのできる温かい業務であることに気付いた
というものであった。

看護は、病気やけがを治療するだけじゃな
くて、心の面で患者さんを支えてあげることも
看護のうちのかなと思いました。(学生G)

《人との関わりへの興味》とは、人と関わ
っていく看護の業務に興味を持っていたとい
うものであった。

私自身、人と関わっていくことに興味を持
てました。(学生H)

(5) 【死への関心】

【死への関心】とは、改めて死や命、人生
について考えたというものであった。このカ
テゴリーは、《死についてもっと知りたい》、《人
生を考えた》、《死について考えた》、《命を考
えた》の4サブカテゴリーから構成された。

《死についてもっと知りたい》とは、死に
ついてより詳しく教えてほしい、専門書籍を
紹介してほしいというものであった。

その受け入れ方(今まで患者さんのいろん
な死をみてきて)を教えていただきたいです。
(学生I)

《人生を考えた》とは、他者及び自らの人
生の終わり方や生き方について考えたという

ものであった。

いろいろな方の人生の終わり、生き方、また自分の人生について考える機会となりました。(学生J)

《死について考えた》とは、改めて死と向かい合い、死を考えることができたというものであった。

死とむきあうことは今まであまりなかったので、この授業で考えることができてよかったです。(学生D)

《命を考えた》とは、限りある命に目を向けて考えたというものであった。

ぞうの絵本の話やいろいろな話を聞いて命というものをあらためて考えさせられました。(学生E)

(6) 【死の意識の変化】

【死の意識の変化】とは、授業を受けたことで、死に対する思いや感情が変わったというものであった。このカテゴリーは、《死の恐怖は変化する》、《死への恐怖が軽減した》、《身近な人の死を受け入れたい》、《死を受け入れるべきだった》の4サブカテゴリーから構成された。

《死の恐怖は変化する》とは、死を恐怖と感ずるか否かは、その時置かれた状況により異なるというものであった。

死は怖いものだと思っていましたが、その場面や環境などで変わってくると感じました。(学生K)

《死への恐怖が軽減した》とは、これまで身近な人の死を体験することで抱いていた死を怖いと思う気持ちが、授業を受けたことで軽減したというものであった。

小さい頃におじいさんが事故で亡くなって、おばさんが40代にしてがんで亡くなってしまい、小さい頃から死への恐怖がとてもありました。でも、今回の話を聞いて死に対して少し恐怖がなくなって…(学生L)

《身近な人の死を受け入れたい》とは、これから先身近な人の死に直面したときに、死

を避けるのではなくそれを受け入れたいというものであった。

これからそういうことがあったら、ちゃんと向きあって看取ってあげたいと思いました。(学生P)

《死を受け入れるべきだった》とは、これまで受け入れがたいと感じていた身近な人や動物の死に対する過去の体験を、受け入れれば良かったとする思いの変化であった。

どうしても無理と思っても、ちゃんと勇気を持って向き合うべきだったなと今も後悔しています。(学生C)

(7) 【終末期ケアへの関心】

【終末期ケアへの関心】とは、授業を受けたことで、終末期ケアについて興味や課題を持つことができたというものであった。このカテゴリーは、《終末期ケアについての理解が深まった》、《終末期患者への対話方法が不安》、《本人主体のケアが大切》、《安心して最期を迎えられる援助がしたい》、《死と向き合い看取りたい》、《幸せな最期を援助したい》、《身近な人の想いを叶えたい》の7サブカテゴリーから構成された。

《終末期ケアについての理解が深まった》とは、終末期ケアの大切さやケアの方法を知ることができたというものであった。

死を苦痛だとか不安に考えている人をどうケアするのか分かったので良かった。(学生M)

《終末期患者への対話方法が不安》とは、終末期を迎える人と話をする場合、どのように話をしたらよいかわからず不安であるというものであった。

もう亡くなってしまうことが分かっている患者さんを前にしたら、何をしたら、何を話したらいいのか、分からなくなってしまうだろうと思いました。(学生N)

《本人主体のケアが大切》とは、終末期ケアでは、終末期を迎える人本人の生き方を尊重することに一番の視点が置かれていることを理解したというものであった。

終末期ケアっていうのはとっても辛いけど、患者さんにとって自分が自分でいられるという点でいいと思いました。(学生O)

《安心して最期を迎えられる援助がしたい》とは、終末期ケアをするときが来たら、終末期を迎える人が、心穏やかに最期を迎えられるような援助がしたいというものであった。

親のことをもっと知って、死を迎える場面になったとき、「大丈夫だよ」と声をかけてあげられるように、日常から考えて行きたいです。(学生K)

《死と向き合い看取りたい》とは、人の死に遭遇したら、逃げることなく死を受け入れてきちんと看取りたいというものであった。

もし、これからそういうことがあったら、ちゃんと向きあって看取ってあげたいと思いました。(学生C)

《幸せな最期を援助したい》とは、人生を終える人が幸せな最期であるようにケアを行いたいというものであった。

もし、自分が介護職などについて、このような状況を迎えることがあったら、その患者さんや利用者さんにとって、一番幸せな状態で逝かせてあげられたらいいなと思いました。(学生P)

《身近な人の想いを叶えたい》とは、身近な人が生きていううちに、出来る限りその人の願いを叶えてあげたいというものであった。

おばあちゃんのやりたいことや、やってほしいことを、今たくさんやってあげたいというも思っています。(学生B)

(8) 【身近な人の死を回想】

【身近な人の死を回想】とは、授業を受けたことで、家族や親戚、ペットといった身近な存在の死を思い出した、または考えたというものであった。このカテゴリーは、《身近な人の死を回想》、《身近な人の死を予測》の2サブカテゴリーから構成された。

《身近な人の死を回想》とは、祖父母や親戚、そしてペットなどの死に出会ったときの

気持ちを思い出したというものであった。

祖父が亡くなったのは、小学校低学年のときだったので、ただ悲しいという思い出しかないのですが、最近で覚えている身近な死は飼犬が事故で死んでしまったことです。(学生C)

《身近な人の死を予測》とは、大切な家族に近い将来、死が訪れるのではないかと予想したというものであった。

うちのおばあちゃんも今78歳で、もうすぐ80歳になってしまうので、そろそろ心の準備をしないといけないなと思っています。(学生B)

(9) 【生き方を考えた】

【生き方を考えた】とは、死を学んだことで、自分の命や人生を前向きにとらえ、精一杯生きていきたいと考えることができたというものであった。このカテゴリーは、《今を精一杯生きたい》、《目標に向かって生きたい》、《日頃から死を考えて生きる》、《悔いのない生き方をしたい》の4サブカテゴリーから構成された。

《今を精一杯生きたい》とは、今の命を大切に一生懸命生きていきたいというものであった。

今は、まだ人生の中であまり長く生きていないので、これからの人生1日、毎日、一瞬を大切に目標を持って生きたいと思いました。(学生Q)

《目標に向かって生きたい》とは、限りある命、毎日を無駄にしないように人生の目標を決めて生きていきたいというものであった。

一日一日を大切に、常に自分の中で目標を決めて生きていこうと思いました。(学生L)

《日頃から死を考えて生きる》とは、必ず訪れる身近な人の死を、普段から意識して毎日を送っていききたいというものであった。

(自分が)親にできることは何か、親のことをもっと知って死を迎える場面になった時、「大丈夫だよ」と声をかけてあげられるように、日常から考えていきたいです。(学生K)

《悔いのない生き方をしたい》とは、限りある命に対して、納得のいく生き方をしていきたいというものであった。

死ぬという時に、私はこの世に生まれてたくさんの人と出逢えて良い経験ができたな、と幸せに思えるような人生にしたいと思いました。(学生R)

(10) 【生命倫理への疑問】

【生命倫理への疑問】とは、生命にかかわる倫理について疑問や問いを抱いたというものであった。このカテゴリーは、《死の決定方法への疑問》、《臓器提供への関心》、《余命の宣告の是非》、《検体解剖への関心》の4サブカテゴリーから構成された。

《死の決定方法への疑問》とは、命の終わり方を決定する権利は誰にあるのか疑問に思うというものであった。

亡くなる時の手段として安楽死がありますが、これは他人の意見で決まるのでしょうか、また、家族などが決めることができるのか。(学生S)

《臓器提供への関心》とは、死後臓器を他人に提供することについて気がかりであるというものであった。

たまに家で臓器提供の話をし、母と兄は脳死した場合臓器提供をすと言って、父はそれにすごく反対していました。やはり、脳死の考え方や死んだ人の体を傷つけるのが嫌だと父は考えているのだと思います。(学生T)

《余命の宣告の是非》とは、残された命が短いことを本人に伝えるべきか否か疑問であるというものであった。

余命が少ないことを本人に伝えるべきだと思いますか。(学生H)

《検体解剖への関心》とは、死亡直後に実施される人体解剖を残酷に思うというものであった。

先生は、解剖を目のあたりにしていた訳ですが、亡くなった方の解剖をしているところを見るというのは本当に残酷で辛いことだと

思います。(学生R)

考 察

1. 授業前後の死に対する意識の変化

臨老式死生観尺度において授業前後の得点を比較したところ、第Ⅱ因子「死への恐怖・不安」と第Ⅳ因子「死からの回避」ともに、授業後の得点が授業前の得点に比して顕著に低下していた。これは授業を通して、死に対する恐怖や不安が軽減し、死を避けない傾向になった、すなわち死についての意識が肯定的に変化したことを示していた。授業後の意見・感想の分析からも、学生は《死は怖く悲しいもの》、『今まで身近な人の死を避けてきた』など死に対する否定的感情の記述はあるものの、《死についてもっと知りたい》など【死への関心】や『死の恐怖は環境で変わる』《死への恐怖が軽減した》という記述のほか、未来を予測し《身近な人の死を受け入れたい》また過去の体験を振り返り《死を受け入れるべきだった》といった思いも記述され、死を怖がり避けるだけでなく、死についての知識や関心をもつことで死への恐怖が軽減するといった【死の意識の変化】があったことを示した。

死を題材とした授業を通して、学生は祖父母やペットの死を思い出すなど【身近な人の死を回想】していた。その体験を振り返ることで、死と向き合うことを避けてきた自分自身の行動に気づくとともに、いのちあるものはやがて老いて死を迎えるといういのちの限界を認識し、『毎日を精一杯生きたい』『目標に向かって生きたい』『悔いが無いように死にたい』など【生き方を考えた】という記述に繋がっていったと考えられる。これは、養護教諭養成課程で死の教育を検討し、「学生は死を意識することで生き方を考えるなど前向きな価値観へ変化していた」²²⁾とする先行研究の結果とも一致していた。

さらに、《死と向き合い看取りたい》、《安心

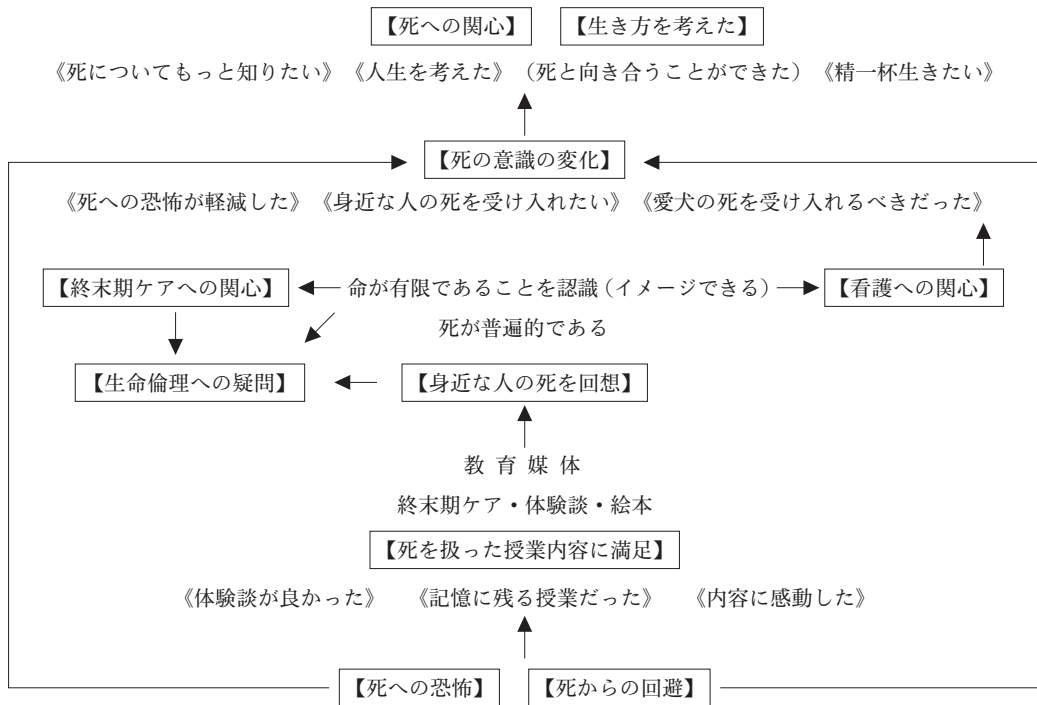


図2 10カテゴリーの関係

して最期が迎えられる援助がしたい」といった【終末期ケアへの関心】や、《死の決定方法への疑問》、《臓器提供への関心》そして《余命宣告の是非》など【生命倫理への疑問】などの幅広い疑問や学習意欲にまで意識が展開され、学生自身の生き方をみつめる契機に繋がっていたことが示唆された。10カテゴリーの関係を図2に示す。

2. 本研究における死生観が変化した要因

本研究における授業構成は、高齢者の終末期ケアに関する医・看護学科用教育プログラムモデルを参考とし、そこに筆者らの終末期ケアの実践事例や高齢者の死と向き合うのに適切と考えた絵本を組み入れて構成したものであった。その結果、『現場の話が聞けて良かった』、《内容に感動した》、《記憶に残る内容だった》など【授業内容に満足】がみられた。そして、学生の死生観に変化をもたらした要因として考えられるものは、第一に、誰にでも訪れるライフサイクルにおける「老いの延長での死」に焦点を当てたということである。

人は必ず老いてやがて死を迎える。すなわち死とは普遍的な事象であり誰にでも訪れるということを認識することが、無理のない形で死と向き合い、死を受け入れることを可能にすると考えられる。第二は、死に関する基本的知識に加えて終末期ケアの実践事例や絵本といった学生が死をイメージしやすい媒体を用いたことであった。これらは『「毎日を大切に生きよ」と言った祖父の言葉を思い出した』、『子どものころに亡くなった祖父母や叔母を思い出した』など【身近な人の死を回想】を通して、死に関する知識の理解を容易にするうえで役立ったといえる。第三は、命が有限であることを認識できる働きかけができたことである。過去の祖父母やペットなどとの死別体験から想起する否定的な感情だけでなく、命あるものはやがて老いて死を迎えるという命の限界に気づけたことであった。それが【生き方を考えた】という記述に繋がっていったと考えられる。すなわち、【死の意識の変化】のためには、死が普遍的であり、命が有限である

ことを認識できる媒体が必要であるといえる。

看護学生の死生観に及ぼす要因について、「身近な人の死は影響していなかった」⁶⁾¹²⁾とする研究結果の一方で、「死に関する経験によって死生観は大きく異なる」⁴⁾とする、小学5年生から大学生を対象にした調査結果も報告されている。さらに、死生観の変化は死に関する経験の有無だけでなく、「死別体験をしたときにどのように思索したか、その深さや頻度が影響するのではないか」²⁵⁾とも言われている。

以上のことから、本研究における学生の死生観に及ぼした要因は、過去の身近な人の死や絵本という疑似体験を通して、死について深く考え、死が普遍的であり命が有限であることを受け止めることができたからではないかと考えられる。すなわち、死に関する実体験及び疑似体験と知識を結びつけ思索を促すことで、はじめて死が普遍的であり命が有限であることが理解できるし、それが死の教育の目標であるといえる。

3. 養護教諭養成課程における死の教育内容はどうか

今後の養護教諭養成課程における死の教育目標は以下の二つが考えられる。一つ目は学生自身が主体的に「このように生きたい」という目標がもてることであり、二つ目は将来児童生徒の疾病や喪失体験に遭遇した時に戸惑うことなく対応できることである。生涯教育としての死の準備教育は、1) 専門知識伝達のレベル(知識のレベル)、2) 価値観のレベル、3) 感情のレベル、4) 技術のレベルの4つのレベルで提示²⁾されている。本研究の結果及びこれらを踏まえて、死の教育内容は、死に関する基本的知識を理解し易く解説することを基盤とし、いのちや死を考える絵本など学生が死をイメージしやすい媒体を活用して感情・情緒の側面に働きかけ、死への過剰な恐怖感を抱かないよう配慮すること。さらに、延命措置や事前意思決定支援など価値観の教育、

実践事例を通じた技術レベルの習得を加味した授業構成を行うなど工夫を重ねる必要がある。学生が知識を学ぶと共に、【身近な人の死を回想】することや疑似体験を通して、過去の喪失体験が意味するものを改めて問い直し、死に対する思索が深まるよう働きかけることが必要であるといえる。

結 論

高齢者に焦点を当てた終末期ケアの授業を通して、死に対する恐怖や不安が軽減し死を避けない傾向、すなわち死についての意識が肯定的に変化していた。学生の死生観に変化をもたらした要因として考えられるものは、第一に誰にでも訪れるライフサイクルにおける「老いの延長での死」に焦点を当てたということであり、第二は死に関する基本的知識に加えて終末期ケアの実践事例や絵本といった学生が死をイメージしやすい媒体を用いたことであった。第三は命が有限であることを認識できる働きかけができたことである。養護教諭養成課程における授業内容は、死に対する基本的な知識に加えて【身近な人の死を回想】や疑似体験を通して死に対する思索を促し、命が有限であることを認識させることができれば、【死の意識の変化】【死への関心】【生き方を考えた】など死生観の変化が期待できることが示唆された。

本研究の限界と今後の課題

養護教諭養成課程における「死生観を養う教育」の在り方を検討してきた。しかし、1クラスのみデータであり、この結果は普遍的なものであるとはいえない。また、本研究の対象は、宗教教育に基づく学校行事や講義を通して、折に触れ自己をみつめる機会に恵まれている学生達であった。それらの体験がレディネスとなり本研究の死生観の変化に影響を及ぼしているものも予測される。

今後は、さらにクラス数を増やすこと、ま

た、死の体験の有無や宗教教育など学生の背景による死生観形成の比較を検討することが課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力くださった学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 厚生労働省：死亡の場所別にみた死亡数・構成割合の年次推移。人口動態統計, 2001 < <http://www.mhlo.go.jp/toukei/saikin/suio4/delh5.html> > (28 Feb.2011).
- 2) アルフォンス・デーケン：死の準備教育の意義－生涯教育として捉える。死への準備教育 第1巻, 死を教える, メヂカルフレンド社, 東京, 1986, p.3.
- 3) 須田民子：小学校における「いのちの教育(生と死の教育)」－死に触れる教育について－。人間化学研究会, 生と死, 8, 6-17, 2006.
- 4) 伊藤裕子, 斎藤文江：思春期・青年期における死生観の発達。Japanese Journal of Counseling Science, 41, 213-223, 2008.
- 5) 杉原トヨ子, 中柳美恵子, 宮崎博子：日本人の死生観に関する文献学的研究。臨床死生学, 13, 73-80, 2008.
- 6) 岡田麻利子, 上原充世：ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討。鹿児島純心女子大学栄養学部紀要, 11, 21-35, 2007.
- 7) 岡本双美子, 石井京子：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析。日本看護研究学会誌, 28 (4), 53-60, 2005.
- 8) 石田順子, 石田和子, 神田清子：看護学生の死生観に関する研究。桐生短期大学紀要, 18, 109-114, 2007.
- 9) 平川仁尚, 葛谷雅文, 植村和正：高齢者の終末期ケアに関する教育内容について。医学教育, 40 (1), 61-64, 2009.
- 10) 永井伸一：医療と死生観, 医療と人間教育, 開成出版, 東京, 2000, pp.63-77.
- 11) 平井啓, 坂田幸弘, 安部幸志ほか：死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証－。死の臨床, 23 (1), 71-73, 2000.
- 12) 糸島陽子：死生観形成に関する調査－看護学生と大学生の比較－。京都市立看護短期大学紀要, 30, 141-147, 2003.
- 13) 渡辺きよみ, 野村和子, 金津春江：介護学生1・2年生の死生観の比較検討。大阪体育大学短期大学部紀要, 8, 57-68, 2007.
- 14) 丹下智香子：死生観の展開。名古屋大学教育学部紀要, 42, 149-156, 1995.
- 15) 高松信英：建学の精神と宗教教育, 真宗大谷派中高教職員対象宗教教育研修会資料, 2001.
- 16) 仁宮真紀, 津島ひろ江, 秋山淳子：通常学級で行う医療的ケアの実践とそのニーズ。川崎医療福祉学会誌, 12 (2), 285-295, 2002.
- 17) 中桐佐智子, 天野敦子, 岡田加奈子：ターミナルケア, 最新看護学 学校で役立つ看護技術, 東山書房, 東京, 2007, p.20.
- 18) 梶原京子, 新山悦子, 忠津佐和代：がんで子どもを亡くした母親の講演後における養護教諭養成課程学生の自由記述調査結果の検討。小児看護, 38, 185-187, 2008.
- 19) 藤腹明子：教材としての映画・テレビー看護教育の体験をふまえて－。死の準備教育(Death Education) 第1巻, 死を教える, メヂカルフレンド社, 東京, 1986, pp.270-283.
- 20) 井上仁美, 岡田洋子, 菅野予史季ほか：小学生を対象としたDeath Educationの実践と評価。石川看護雑誌, 3, 65-75, 2005.
- 21) 平川仁尚, 葛谷雅文, 加藤利章ら：高齢者ケアに関わる職員を対象とした絵本を

- 用いた死の教育の効果. *Hospice and Home Care* 17(1), 14-16, 2009.
- 22) 落合清子, 長井美佐子: 看護学生の「死のイメージ」の変化—読書による死生観確立への影響について—. 聖クリストファー大学短期大学部紀要, 27, 7-13, 2004.
- 23) ローレンス・ブルギニョン (柳田邦男訳): だいじょうぶだよ, ゾウさん, 文溪社, 東京, 2005.
- 24) レオ・バスカーリア (みらいなな訳): 葉っぱのフレディー, 童話屋, 東京, 2008.
- 25) 丹下智香子: 青年前期・中期における死に対する態度尺度の構成及び妥当性・信頼性の検討. *心理学研究*, 70, 327-332, 2004.